世界をしらない少女

まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界をしらない少女

【Ｎコード】
Ｎ９０６０Ｘ

【作者名】
まり

【あらすじ】
狭山　辰徳（３５）の前に突然現れたのは、髪をバサバサとなびかせ、ボロボロの服を着て痩せこけた女。
彼女は中学生の頃に亡くなった初恋の人だった。
死んだと思っていた人が突然現れたことに戸惑う辰徳…

彼女は中学生の頃に、義理の父に暴行にうけ子供ができていたと告白

死を選び、山にいくが死にきれず子供を山の中で出産、山で子供を
育てたと言う。

そして彼女は辰徳にお願いをする

もう自分の命は短い、どうか子供を助けてほしいと。

山の中で育てられた少女、彼女は山の中だけがすべての世界…

戸惑う辰徳だか、少女を救いにむかう決心をする。

この世界をしらない少女と向き合う辰徳だか…

たつのんとよぶ女

「あぁ…もうこんな時間か…」

そうつぶやきながら、僕は窓に目を向けた。

「真っ暗だな…」

時計は午後9時をまわっていた。

「また、おそくなったな、今日はここまで！」

僕はあわただしく机を片付け始める、いつものように大きなため息をついたあと、部屋に鍵をかけ足早に階段をかけ降りる。

「あー、肩いてー」

僕の声が階段に響き渡る、毎度毎度のことだが何で僕ばかり残業なんだよ！

そう心でつぶやきながら両肩をぐるぐるとまわしだす。

もう誰もいない会社、何となく薄気味悪い…

「しかし何でこのビルは、エレベーターついてないのかな！」

僕の働く事務所は、ビルの五階にある、毎日の登りおりは疲れた体に大ダメージだ…。

長い階段をおりていくと、もう誰ものこっていない会社で一人だけ僕を待っているやつがいる、そいつは一階の窓口にある大きな一枚の鏡とその中に写る僕だ。

「今日も1日お疲れ様、また明日」

そう、鏡の中の自分に挨拶をして帰るのが僕の日課だ…。

僕の会社から自宅までは、車で３０分程度の距離だが…。

こうも街灯もない山道をはしっていると、同じ道を永遠にまわり続けているのではないかという錯覚におちいる。

本当、田舎だよ。

しばらく走り続けると、ポツンポツンと光が目に飛び込んでくる、寂しいながならにキラキラと輝く町のあかりだ。

「ただいま…」

そう光につぶやくのも、いつの間にか日課になっていた。

光が見えてほどなく、僕の自宅も見えてくる。

今日も1日頑張ったよ本当に、僕は疲れた手つきで車を車庫にまわした。

そして、いつものように、バックで車庫に入ろうとした時。

「ん…？なんだ…」

ミラーごしに、僕の目に飛び込んできたのは、車庫のすみに小さく丸まった黒い物体だった…。

「なんだあれ？」

薄暗い車庫の中では、ミラーごしにそれが何なのか確認する事はできない。

僕は仕方なく車をおりて、黒い物体の確認にむかった。

コツン、コツン…

静まり返った車庫の中に僕の足音が響き渡る…

コツン…コツン

ガサ…！

「えっ！？うわぁ！」

突然動き出した黒い物体に僕は思わず大声をあげる！

「きゃぁ」

僕の声に驚いたように、黒い物体が声をあげた。

え…？女性の声…？

人なのか？

「だ、誰だ？」

僕の声に反応するかのように、黒い物体は立ち上がり、その姿はようやく人だと認識できひとまずほっとする。

しかし、こんか時間に人の家の車庫にもぐりこんでいたやつだ、僕は自然と拳に力が入った。

しばらく二人の動きがとまる…

「た…たつ…のん?」

先に声をあげたのは相手だったが

え……!い、いま何て…

得たいの知れない人影から聞こえてきた声に、背筋が凍った…。

たつのん…それは、僕がまだ中学生の頃に呼ばれていたあだ名。

聞きなれたあだ名…

しかし、そう呼んでいた人物はただ1人だけ…

いつも

笑顔で

飛び付いてきた

あいつ…

僕の…

初恋の…人

「たつのん…」

再び聞こえる声。

「や、やめろ！だ、誰だ！」

体から血の気がひいていく

聞き覚えのある声…

冷や汗が体を流れ落ちる…

心臓が今にも爆発しそうな勢いて鼓動を打つ

だって

だって…あいつは、あいつは、中学生の時に死んだんだ！

かなえ

僕は、ゆっくりと後退りをする…

それに、合わせるかのようにこちらにむかってくる人影！

恐怖で目がらそらせない…

やがて、僕の体は外の街灯に照らし出される。

そして…彼女も…。

「あ、あぁぁ」

次の瞬間、僕の目に飛び込んできたのは、髪をバサバサになびかせ、ボロホロの服に身を包まれ全身痩せこけた女性だった。

「たつのん…」

僕の名を呼び続ける女性…

その姿は、まるでお化けのようだ！

「ふざけるな、お前誰だよ」

必死に声をふりしぼりながら、彼女を睨み付ける！

「わ、わた、私は…」

かすれた、とてもか細い声…

「私は、か、かなえ…です」

そう言った瞬間、彼女は泣き崩れていく。

必死でこちらをみながら、口を動かしている、きっと声にならないのだろう…。

かなえ…。

間違いない…彼女の名だ、中学生の頃に亡くなった彼女と同じ名前、
そして、かすれてはいるが懐かしい声…。

一体どうなっているんだ、目の前の彼女は幽霊なのか…。

ゴクリと大きく息をのむ…

「う、う…うわぁ、う」

目の前で、かなえを名のる女性の姿に戸惑いを隠せない。

そんな僕の前で必死に涙をぬぐう彼女…

「か、かなえは…し、死んだんだ！君は一体何者なんだ！」

僕の言葉に反応するかのように、顔をあげ僕を見つめる。

「し、死んだんだ…やっぱり、死んだんだ…」

「…な、何を言ってるんだ！」

彼女が、ゆっくりと近くに歩みよってくる。

僕はその歩みと一緒に、一歩一歩後退りをしてしまう。

「死んだん事になってて、当たり前だよね…」

「えっ？」

「たつのんは、かわらないね…」

「……。」

何を急に…。

言葉がでてこない。

「さくらんぼ、よく一緒にとって食べたよね

」

「！！」

僕はその言葉を聞いてハッとしてしまう。

確信するしかなかった…。

間違いない、かなえだ…。

僕の家の庭には、さくらんぼの気が植られていて、昔よくかなえと一緒に木に登ってたべていた…。

彼女との一番の思い出だ。

「う、嘘だろ…かなえ…お前、幽霊なのか？」

「そう、なりたかった…かな」

「何を言ってるんだ！！」

頭の整理なんかできるはずがない、今この瞬間の現状だって受け入れることも、理解することもできない！

落ち着く事だってできないが、今僕の目の前には、かなえらしき人が立っている。

「と、とにかく…中に入らないか？」

僕は何を言ってるんだ！

「いいの？」

でも、このまま逃げるわけにもいかない。

僕はコクりとうなずく。

「わたし、幽霊かもよ…」

「そ、それを今から確かめるんだ！」

僕の言葉に彼女は、涙をためた目で少しだけ微笑んだ。

裏口

肩ごしに彼女の視線を感じながらゆっくりと足を進めていく。

何がどうなっているのか。

僕は震える手を必死でかくしながら、玄関を開けた。

「あの…」

ビクッ!!

彼女の声に思わず飛び上がる。

「な、なにか?」

「あの、こんな格好なんですが、おじゃましていいんですか?」

彼女の声がいちだんと小さく、大きく顔をそらしている。

「……。」

先程とは違い、玄関からもれる光でハッキリと彼女の姿が見えてくる。

こ、これは……

肌は驚くほど汚れて黒く、髪は地面までつたいボサボサと広がり顔をおおっている。

服は…ボロポロすぎて、服のかたちをなしていなかった…。

本当に、かなえなのか?

もし、そうだとしたら…彼女に一体何が?

「ダメ？ですよね」

「えっ？」

しまった、思わず黙りこんでしまっていた。

「い、いや、えっと…し、シャワー使います？」

あれ？なにいってんだ僕は…、しかし、確かにこの格好であがられるのは…。

「いいんですか？」

「ど、どうぞ」

「ありがとう」

そう言うと彼女は頭を大きくさげて、スタスタと歩き、僕の横を通りすぎていく。

彼女は迷うことなく、家の裏口に向かっていくのがわかった。

僕はあらためて思った！

本当にか、かなえ…なのか。

彼女は、迷うことなく裏口にあるお風呂場に向かっているんだ。

かなえとは、子供の頃からよく遊んでいて、悪いことをして汚した服を親に内緒で、よく裏口にまわりお風呂で洗っていた。

かなえ…。

僕はバタバタと部屋にあがり、裏口の鍵を開けた。

「ありがとう」

「いや、本当に、かなえなんだな」

彼女はコクりと頭を下げ、鼻をすすっている。

「服、僕のおいとくから」

「ありがとう」

そして、僕は自分の部屋へむかった。

涙

遠くから、シャワーの音が聞こえる…

「かなえ…」

まだ、僕の心は半信半疑だが…

「ふぅ…」

僕は、服を手に取りお風呂場へ向かった。

「きゃー、あっつ！熱、あっつぅーあちー！！！」

お風呂場から叫び声ともとれるような声が聞こえる！

「えっ？ちょっ！か、かなえ？大丈夫か？」

慌てて声をかける！

すると
僕の声と同時にシャワーの音がとまった！

カチャ…

えっ？

「ごめんなさい、うるさかった？温かいお湯浴びるの久しぶりすぎて」

彼女は、ドアを少しだけ開けそこから顔をのぞかせ、苦笑いしていた。

「か、かなえ、かなえ、かなえ！」

「たつのん？」

僕は、その場に泣き崩れてしまった…。

シャワーを浴びてキレイになった彼女の顔は、痩せこけてはいるものの、間違いなく彼女の顔だった。

「たつのん？大丈夫…」

ハッ？

「着替え、おいとく、僕のだけどつかって」

そう言うと、僕は顔をあげないまま逃げるようにこの場を離れた。

落ち着け、落ち着くんだ！

かなえは、生きていたんだ！死んでなんかなかったんだ！

口から心臓が飛び出してきそうなくらい緊張していた、いろんな気持ちがまざりあってパニックになりそうだ！

僕はふらふらになりながらリビングに座り込んだ。

「たつのん？」

「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「きゃゃゃゃ」

僕の驚いた声に、驚いて彼女も叫ぶ！

ふと、気がつくと彼女がシャワーを終えて立っていた！

「ご、ごごご、ごめん！」

「び、ビックリした」

「は、はやかったね！」

「えっ？結構長くつかわせてもらったよ」

ま、マジか！時間がすぎたことさえわからなかった。

目の前に立っている彼女は、先程までとはまるで別人で、髪はタオルでくるみ肌も白くなっていた。

「シャワー…ありがとう」

「い、いや、えっと…適当に座って」

彼女を見てるとまた涙があふれだしてくる。

「飲み物入れてくるよ」

また僕は、逃げるようにその場をさった。

僕は、必死で涙をぬぐいながら台所へむかう、落ち着くんだ！落ち着け！

「そうだ、お茶だ、お茶をいれよう！
お茶～！お茶～！」

「お茶、お茶おちゃちゃ！おちゃ～」

「た、たつのん？」

「わぁ茶ゃゃゃゃゃゃゃゃ」

「きゃゃゃゃ！」

ハッ？！

しまった！ビックリしてまた思わず叫んでしまった！

「ごごご、ごめん」

「ハハハハ、ハハハハ」

きょとんとしていた彼女の顔が笑った…。

「ハハハハ」

そして、僕も一緒に笑った彼女と一緒に笑うのは何年ぶりだろう。

そして、僕らは二人でしばらくの間泣き崩れながら笑いあった。

「かなえ、とりあえず座って、聞きたいことだらけだよ」

「うん」

僕らはリビングの椅子に腰かけた。

「かなえ、今までどこにいたんだ?」

「……山。」

「山?」

「そう、山」

山って…。何を言ってるんだ!

「あのね、あの…」

かなえは、口を動かしながら下をむいた。

「かなえ、ゆっくりでいいから」

かなえは、小さく頭を上下している。

しばらくの沈黙のあと、かなえの鼻をすする音だけが部屋に響びいていた。

よほどつらい思いをしていたのだろう…。

「あのね、何から話したらいいのかな…」

少し頭をあげては話そうとするが、また下をむく。

そんなしぐさを何度も繰り返す
そして、かなえはまた黙りこむ

僕はかなえが話してくれるのをじっとまった。

もう何年前になるのだろう、僕が15才の頃だ、かなえとは家も近くて子供の頃からずっと一緒に遊んでいた。

毎朝同じ時間に待ち合わせをして、一緒に学校に通っていた。

その日もいつものように彼女がくるのを待っていたんだ、しかし何時になっても彼女は来なかった。

その日からずっと…。

僕は毎日彼女を探した、僕だけじゃない僕のまわりの人達も、警察も彼女の両親も…。

でも彼女が見つかることはなかった…。

それからしばらくして、警察と両親がかなえの部屋で「死にます」と書かれたノートを見つけてしまう。

見つからない彼女、まわりの人々は彼女の死をうけいれた。

そして、僕も…。

「あのね…」

「えっ！」

あっ…いけない頭の中が整理できなくて、つい考えごとで頭がいっぱいになってしまう。

「ごめんな、どうした？」

それから、かなえはゆっくりと話しはじめる…

父親

「私ね、死のうと思ったの…。」

「うん」

彼女の腕にどんどんと力が入るのがわかる、こきざみに震えながら、力一杯拳をにぎっている。

「かなえ、大丈夫か！」

僕はとっさに彼女の手を握った！

なんて細い手をしているんだ、それにとても冷たい…。

「あったかい」

「えっ？」

「ありがとう」

そう言って彼女はにこりと笑った。

あぁ、この顔だ僕の大好きな笑顔だ。

「私ね、あいつに…あいつ、に」

「うん、あの…かなえあいつって？」

ギュッ！

かなえが僕の手を強くにぎりかえしてくる。

「お、お父さん…」

「えっ？おじさん？」

かなえが大きく頭を下げた。

「あいつは、本当の父親じゃない…から」

「うん」

かなえの本当のお父さんは、かなえが生まれてすぐに亡くなったらしく、今の父親は僕らがまだ小さな頃にやってきた。

「おじさんがどうかした？」

「私は！？」

かなえの声が突然叫び声にかわる！

「私は、あいつにおそわれたの！」

……。

えっ？

今、なんて…。

「私は、お母さんのいない間におそわれたの！」

嘘だ…ろ。

「あいつに！」

嘘だ！

だって、おじさんはかなえがいなくなった時に本当に心配して、必死でかなえを…。

「それだけじゃない、私はあいつの子供を…」

「子供を…？」

何を言っているんだ…まさか、おじさんの子供…。

「うわぁぁぁぁぁぁ」

かなえが大きな声で泣き崩れ、僕は彼女の体を強く抱きしめた！

「かなえ、かなえ…」

嘘だろ…、おじさん！嘘だろ。

こんな事が、こんな事がおきていいはずない！

ちくしょう！！

かなえは一体どんな体験をしてしまったんだ！

「うわぁぁぁぁぁぁ、うわぁぁぁぁぁぁ」

「かなえ、大丈夫だから、かなえ…」

「ひっく、ひっく」

「かなえ…大丈夫？」

「お母さんには、言えなかったの」

おばさん、かなえは知らないんだおばさんはかなえがいなくなったあと病気で亡くなってしまったんだ。

しかし今は、この話はやめておこう。

「子供がお腹にいることがわかって、私は山に行ったの、死のうって…思った…。」

怒りと切なさが込み上げてくる、僕は何も知らずに…あんなにいつも一緒にいたのに。

僕は…。

「死ねなかった…死ねなかったの」

かなえは、涙をぬぐいながらゆっくりゆっくり話をしてくれる。

しかし、僕はなんと声をかけていいのか正直わからなかった。

「私ね、きっともう長くないと思う」

「えっ？」

突然のかなえの言葉、何をいいだすんだ？

「たつのん…私ね子供産んだの」

「ええ！」

「今も私を山でまってる、あの子は山から出たことが一度もないの」

かなえが僕の両腕を強くにぎりしめながら、僕の顔を必死にのぞきこみ強く言った。

「お願い、あの子を助けて」

「ちょっと、かなえ落ち着いて、山でって、いったい何処なんだ？それに長くないってどういう意味だよ」

あれ？

「かなえ？」

かなえの体がどんどんと倒れていく！

「かなえ！かなえ、かなえー！」

「たつのん、お願い…あの子を助けて」

かなえの目がうつろになっていくのがわかる。

「かなえ、しっかりしろ」

「名前は、のぞ…み、場所は…」

声までもどんどんと小さくなっていく！

嘘だろさっきまで普通に話してたじゃないか！

「かなえ、まってろ今救急車呼ぶから」

立ち上がろうとする僕の腕をつかんでくる彼女！！

「場所は…」

「かなえ…わかった、場所どこ？」

小さくなる声に僕は必死で耳をかたむけた。

「必ず助けに行くから、だからかなえ病院にいこう！」

突然どすっと彼女の重みが体にのしかかる！

「かなえ？かなえ！」

だらりと力がぬけている手を握りしめる！

「嘘だろ、かなえしっかりしろ！」

意識をうしなっている！

僕はあわてて救急車をよんだ。

病気

静かに時がながれる…。

かなえ…。

僕とかなえは、近くの病院にいた。

「辰徳」

声の方に顔をむけると、僕達の同級生でもある山本が立っていた。

「辰徳、彼女は一体誰なんだ?」

「山本先生、あいつ助かるよな」

山本はこの病院の医者で、かなえのこともよく知っている。

「先生はやめろ、それより彼女に見覚えがあるんだが、カルテの名前も…」

「山本…」

「まさかな、幽霊でもつれてきたのか？なんて…」

「かなえだよ…」

二人の間に沈黙がながれる。

「しかし、彼女は亡くなったはずだろ」

「僕も…驚いた。」

山本が頭をぐしゃぐしゃとかきはじめる。

「山本、僕ちょっと行かなくちゃ…」

「おい、ちょっと待てよ」

僕はふらふらな足でゆっくり立ち上がり、山本に深く頭を下げた。

「かなえとの約束なんだ、必ずもどってくるからそれまで彼女をよろしくお願いします」

「お、おい辰徳」

僕は頭を上げて歩き出す。

かなえ…必ずつれてくるからまってろよ。

「はぁ、あいつ大丈夫なのかフラフラじゃないか！しかし、彼女は…」

僕は病院を後に、のぞみちゃんがいる山へむかった。

山へ

僕は車を走らせる。

辺りはほんのり明るさをとりもどしてきていた。

頭がもうろうとする、街を離れてどれくらいたつだろう、かなえはこんな遠くから歩いて来たのだろうか?。

かなえが倒れていく中で、必死で僕に伝えようとした場所だが、本当にこんなところであってるのだろうか。

「確かに…山だな」

はっきりした場所まではわからないが、ここら辺から登ってみるか!

僕は車をおりて中にのぼれそうな場所を探した。

これは、何か目印をつくらないと帰ってこれなくなるよな…。

僕は木に印をつけながら山の奥へと進んでいくことにした。

「のぞみちゃーん、聞こえるかー」

くそ、草や枯れ木に足をとられる！傷だらけだよ。

「のぞみちゃーん」

一体どこにいるんだ？

僕はがむしゃらに山を登っていく、早く早く見つけなくては！

ガサガサ！ガサガサ！「いてっ！」

「のぞみちゃん、いたら返事をしてくれー」

辺りに響き渡る僕の声に、何の反応もなく時間だけが過ぎていく。

「のぞ…」くそぉー声もかすれて出てこない！

それでも僕は必要で彼女を探しつづける。

辺りが少しずつ暗くなりはじめてきた。

「嘘だろ、さっきまで明るかったのに！」

必死になっていたからわからなかったが、僕は山に入ってどれだけの時間がすぎたのか？

はっ！しまった！

僕としたことが、時計も携帯も車においてきてしまった！

「なにやってんだ僕は…くそぉー！」

体にあたる風が少し肌寒い…。

簡単なことじゃないのは理解していたが、こんな山の中、下手したら僕が死んでしまうんじゃないか！

いかん弱音をはくな！しっかりしろ！負けてたまるかー！

「はぁ、はぁ、」

あれ？

気のせいだろうか、あそこだけ草が倒れて道が出来ている気が…！

明らかに不自然に倒れた草木の道は、まだ新しくできたような、こんな所人は通らないだろうし？

ひょっとしてかなえ…かなえが作った目印だろうか？

いやしかし、まさか！熊か猪のたぐいって可能性も！

考えてる間にも日はドンドンと沈んでいく！今は考えてても仕方がないな、僕は獣道にそって山をのぼった。

「はぁ、はぁ、はぁ、」

あれから何時間歩いただろう、体力も限界をむかえようとしている。

しかも、この獣道いっこうに終わりがみえてこない！

くそ、どこにいるんだ！　だいたい普通に考えて見つかるはずなんかないんだ、こんな広い山の中！

心がおれそうだー！

「はぁ、はぁ、はぁ、水…」

「かなえーのぞみー！！」

意識がもうろうとする！

僕はその場に膝まずいてしまった。

「…ま……ま」

えっ？

今のは、人の声じゃ！！

遠くの方からかすかに人の声らしきものが聞こえた気がする！

僕は目を閉じて耳に集中する。

声の先

サラサラ、サラサラ

風にゆれる草木の音「ま、…ま」やっぱり人の声！

「のぞみちゃーん！」

僕は無我夢中で叫んだ！！「のぞみちゃーん！」

きっとのかなえの娘に間違えない！

僕は声のする方にむかって走った、草木が激しく顔にぶつかる！

「くそ、邪魔だー！」

「のぞみちゃーん！どこだー！」

声が聞こえない！

かなえ以外の人間を知らずに育ったんた！
僕の声にビックリしているのかもしれない！

それでも僕は叫び続けた！

「のぞみちゃーん」
えっ？

「うわぁぁぁぁぁぁ！」

突然足元から崩れ落ちる！

嘘だろ！

「うわぁぁぁぁぁぁ！」

何がおこったかわからない！

ただ僕は逆らえることなく山を転げ落ちていく！

「うわぁぁぁぁぁぁ！」

ザザササササササ！ザザササササササ！

ドス！

「うぁうぅぅ」

い…た…。

「マジか…やべ…。」

見つけた

「かはぁ…」

あれ？僕は？

いててててて！

体を動かそうとするが、全身に電気がながれるような痛みがはしる。

僕は…。

目を開けているのに、何も見えない！

「漆黒の闇か…」

かなえはこんな真っ暗な中で生きてきたのか…

。

かなえ…。

「かなえーーー！！」

とてつもない恐怖におそわれる！

真っ暗な世界！

聞きなれない闇の音！

怖い！

ガサガサ！

「！！！！！！」

ひたいから冷や汗が流れ落ち、全身震えが止まらない！

何の音だ！熊……か？鹿か？猿か？

僕の頭は恐怖でいっぱいになり、ただただ怯えることしかできなかった。

たのむ、こないでくれ！こないでくれ！

ガサガサ！

ガサガサ！

「くそ！」

ガサ！

音が頭の上まできて止まったのがわかる。

「くぅ」

僕は思わず目をグッと閉じた！

「ママの…名前、何で」

えっ？

驚きと共に目をあける！

雲間から月明かりがさしこむ…。

人？女の子！かなえと同じ姿！

僕はあわてて体をおこそうとした！

「ういだだだだだ」

「きゃゃゃゃゃ」
ガサガサガサガサ！

しまった、脅かしてしまった！逃げないでくれ！

「のぞみちゃん、のぞみちゃんなんだろ？」

ガサガサ

「なぜ?私の名前…?」

やっぱり。

「よかった!よかったーー!!」

ガサガサガサガサ!

「わわっ!ごめん逃げないで」

思わず大声をはりあげてしまい、彼女をおどろかせてしまう。

「ママに、かなえに頼まれたんだ、君を迎えにきたんだ」

「むかえ?むかえってなに?ママは?」

聞こえるか声が震えてるのがわかる!

「お前なに？みたことない形？ママは？」

「僕は、君のママと友達なんだ、かなえにたのまれて君を助けにきた？」

「友達？友達違う、だってみたことない！
私達と同じ姿…でも違う」

違う？そうか、男の存在もわからないからなのか？

「動物達とも違う！ママはどこ？」

「のぞみちゃん、僕と一緒にママのところに行こう」

「…ママのところに？ママいるとこしってるの？」

「あぁ！」

そう言って僕は、ポケットに手をいれる。

「いてててててて、あぁ怖がらないで！」

「これみて」

僕がポケットから取り出したのは、かなえが持っていたのネックレスだった。

彼女がお風呂に忘れてた物だ。

「ママの！！！！！！」

彼女が僕に飛び付いてきた！

「そう、ママの…ママのところに行こ」

僕はにこりと笑った。

「ママ、ママ、ママ」

「うん、行こうね」

そう言って頭をなでる。

やっとみつけたよ、かなえ。

居場所

あぁ、まさか本当にいるなんて。

正直未だに信じがたい事だらけだ！

しかもこんな広い山の中、見つかるなんて奇跡としかいいようがないよ。

あとは何とか山を下りなければ！

しかしまいったなぁ…。

せっかくつけたてきた目印も、崖からおちたら意味ないよ。

この月明かりも雲にかくれれば真っ暗だ！

「お前、なんだ？」

えっ？

彼女がまじまじと僕を見ている。

「何って？そう聞かれるとなんて答えたらいいんだ」

僕はクスリと笑う。

「お前、似てるけど私達と違う！」

ん～！やっぱりきっと男女の違いを言いたいんだろうな…。

簡単に説明したって理解なんかできないだろうけど！

ペタペタ！

「ない！お前にはこれがついてないぞ！」

そう言って彼女が服をまくりあげる！

！！！！！！

「わあぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

僕はあわてて服をさげた！

「な、なんだ？」

なんだじゃぬわぁーい！

あぁ勘弁してくれ～！

彼女の世界は本当に、かなえと自分とここに住む生き物だけがすべてなんだな。

「はぁ～」

「？？？」

やはり1日も早く山をおりて、かなえのもとに連れていこう！

体は痛いが、足も手も動かせる！

「あのさのぞみちゃん、ここどこだかわかるかな？」

「ここか、山だ！」

うんそうだね！

「そうなんだけどさ、のぞみちゃんはここがどこら変かわかるの？」

「わかるよ？」

よしよし！よかった。

「それとさ、僕さここに落ちる前にのぞみちゃんの声聞いたんだ、のぞみちゃんも僕の声聞こえたよね？」

彼女はコクコクとうなずく。

「その場所まで帰りたいんだけど分かるかな？」

彼女はまたコクコクとうなずく！

「よかったーー！！」

「いだだだだだ！」

ビク！彼女が飛び上がる！

「あぁごめんな、驚くよな」

僕はゆっくりと体をおこした。

くぅ～いてぇー！

「そこまで行きたいのか？その体でいけるのか？」

「大丈夫だよ！」

「わかった、すぐ近くだしついてきて」

えっ？

「近いの？」

「そう、すぐそこ！ついてきて」

そう言って彼女は歩き出す。

「あ、まって！いだだだだだ」

僕はあわてて彼女の後をおった！

印

「ねぇ、もうだいぶ歩いたけど後どれくらいかな?」

僕の足腰が悲鳴をあげている。

「もう少しだ!」

もう少しって…

彼女の距離感に嫌な予感がしてきたぞ。

僕は必死で彼女の後を追いかける!

そんな僕をよそ目に彼女はぐんぐん進んでいく!

「ちょっと、まって!」

……。

「くそぉー、追い付けない」

負けてたまるかぁ～！

ぜぇーぜぇー！！！！

ドン！

「いた！」「いたぁー」

突然の衝撃、どうやら僕は彼女とぶつかってしまったようだ！

「ごめん暗くて下ばかり見てたから止まってくれてたの気付かなかったよ」

「？？？なにいってるの、あれをみてただけ」

あれ？

彼女は真っ暗やみに手をむけているが、僕には何のことだかさっぱり分からない？

「もしかして、何かいるの？」

「なにいってる？あれだ！」

はぁ、僕には1メートル先もみえませんが…。

「あれと、同じものが家まで続いてるの、あんなのこの山の動物はできない、きっとママが作ったんだ！」

ひょっとして…。

「獣道のことをいってるの」

「獣道、なにそれ？」

「あ、えっと…草木が倒れてできた道だよ」

「みち？」

道も通じないか～！

「さっきから何を言ってるの？」

ん～？

「ねぇ、そこまで連れていってくれないか？」

「連れていく？自分で行けばいいじゃないか」

「僕には見えないんだよ」

「えぇぇぇぇぇ！見えないのか？」

コクコクと僕がうなずいていると、彼女が不思議そうな顔をしている。

「こっちだ」

そう言って彼女は僕の手をとり歩きはじめる。

こんな環境で育つと暗くとも目がきくんだな。

「ほら、見えるか？」

「あぁ、ありがとうここまで来ればやみえるよ」

やはりこの道はかなえが作った道なんだろう、きっと僕に彼女の居

場所を教えるために。

「のぞみちゃん、ここは山のどの辺りになるのかな？」

「どの辺り？私の家よりだいぶ下の方だな」

下の方…。

「本当はママに下には絶対行ってはいけないって言われてるんだけど…」

僕がこの道を見つけたのは、山に登っていく途中からだが、彼女は僕がいた所まで近いと言っていたよな。

だとすると、方向的にあっちか！

「あのさ、むこうの辺りに傷がついた木があるはずなんだけど…探すの手伝ってくれない？」

「傷…あれか？」

彼女まっすぐに指をさしている。

えぇぇぇぇぇ！まさか？こんな所からは見えるはずがない！

しかし、方向的にはあっているしいってみるか！

「そこにつれていってほしい！」

「わかった…」

僕は彼女の示す方へむかって歩いた！

一歩（前書き）

お気に入りにしてくれた方々ありがとうございます。

すみません、１３、１４部編集でかなり話がずれてしまいました！

こんな内容でもよんでくださる方々ありがとうございます。

一歩

彼女が指さす方に歩き続けてどれだけたつだろう？

いったい彼女は何処を目指して歩いているのか？

すると、突然彼女がはしりだす！

ちょっとまって！足場も悪くうまく走れない！

「ほら、これだ！違うか？」

「えっ？どれ？」

僕は木へと近づいて確認する。

……。

嘘だろ…。

奇跡だ！

間違いない僕がつけた傷だ！

信じられない、あんな遠くからこの傷を見つけるなんて…。

僕はこんなに近づいてようやく見える傷なのに！

「なあ、あれもか？あそこも！」

彼女が次々と指をさしていく。

……。

すごい、すごいとしかいいようがない！

なんとなくだか方向的にあそこら辺だと言うことはわかる！

「えっと、上の方向じゃなくて下の方向の木で印があるところにつれていってほしい！」

「いいよ！」

よし！希望が見えてきた！これで無事山を降りる事ができる！

「ママに会えるんだよね？」

「あぁ！会えるよ！」

「わかった！こっちだ！」

そう言って彼女はまた僕の手をとり歩き始めた！

一つ、二つ、三つ…。

ぜぇーぜぇー！！！！

もう少し、もう少し！

ドス！

「いてっ！」

彼女の動きが突然とまった！

「どうしたの？」

ん？

震えてる？

そうだよな、こわいよな、怖くないはずがない！彼女にとってここから先は道の世界！

僕は繋いでた彼女手をぐっとにぎりしめる！

「大丈夫！」

「えっ？」

そして僕は彼女の前に一歩踏み込む！

「ここからは、僕が前に行くよしっかりついてきて」

彼女の表情は暗くてわからないけど、繋いだ手を通して彼女の気持ちが伝わってくるようだ！

今までの道を通ってきてなんとなく先がよめてきた、それによく足下を見てみると草木が倒れて、小さな獣道ができている！

これは僕がつけた足跡だ！

もう少し、もう少しだ！

かなえ！

僕は大きな一歩をあるきだした！

山の終わり

「のぞみちゃん、ここを抜けたら山は終わりだから」

「山が、終わる？」

「そう、山が終わる！」

「よく意味が分からない？山に終わりなんてないだろ？」

そうだよな、僕も突然ここで地球が終わりますよ、なんて言われても理解できないだろうな、その先なんて想像すらつかない世界だ。

「とにかく、山は終わるけど大丈夫だから！こわがらずに僕を信じて」

「ははは、変な事言うな！」

あれは、外の景色！ようやく見えてきた！

「ほら、のぞみちゃんあそこが出口だ」

「出口……？。」

しかし、本当によかった！無事に帰ってこれたんだな！

彼女の足がピタリと止まる。

僕は彼女の手を強く握りしめた！

「大丈夫こわくないよ、ついておいで」

僕の目でも確認できる、草木が終わり人工的な道が始まろうとして

いる、この世界彼女の目にはどう写っているのだろう。

「た、つのん…」

「えっ、今なんて?」

「たつのん…」

「どうして君が僕の名前を…」

突然のことで驚いてしまう。

「思い出したの、ママがいなくなる前に「たつのん」って人が来たらついていきなさいって」

「かなえが…」

「ママが何を言ってるかわからなかったから忘れていたの、あなた

がママの言ってるたつのんなの？」

「ああ、そうだよ」

「ママ…」

「さぁ行こう！」

彼女は僕の腕をつかみピタリと横にはりついてくる。

「大丈夫だよ、ママと僕を信じて」

僕はそう言って彼女の頭をなでた。

だんだんと草木はなくなり、目の前に道があらわれる。

「これ、何？」

「ん、これが道って言うんだ、この道がのぞみちゃんのママの所までつながっているんだよ」

彼女はそっとしゃがみ道路をさわる！

「小さな石がかたまって、大きな石になってる」

初めて見る道路か…これから見る物はすべて初めて見るものばかりだろうな、大丈夫だろうか？

さて僕の車は、あそこか。

「のぞみちゃんきて、いくよ」

「えっ？うん」

彼女はそろりそろりと、道路を歩く。

すると、突然彼女が僕の後ろに身を隠しそっと指をさす。

「ねえ、あ、あれなに？」

「あれは、車って言うんだ」

「く、る、ま？」

「そう、車、今からあれにのるんだよ」

「のる？」

「そう、乗る！」

こわいのだろうか？彼女がよりピタリとはりついてきている。

ようやく車に乗れるのか！かなえまってくれ、もう少しで会えるからな！

説明

僕は彼女と一緒に助手席へむかう。

ガチャ

「さぁ乗って」

「……。」

やっぱり、思った通りの反応か。

「お前は、太陽をつかまえたのか？」

太陽？

「すごい！」

突然彼女が車に飛び付いていく！

「お、おい？」

「どこだ、ここか？」

彼女が必死で　車内のライトを指差している、太陽…光か！

これは、いちいち説明していくのも大変だな。

「のぞみちゃんとりあえずここに座ってもらえるかな？」

しばらくの間、じっと席を見つめた彼女は警戒しながらけわしい顔で、ゆっくり腰をおろした！

「わあああぁぁぁぁぁぁ！！」

ぷっ！

「ん？何がおかしい」

「いや、ごめん」

さて、僕も車に乗るか！

いや…その前に。

僕は車においていた携帯を手にとった！

うわぁ、すごい着信だな！

「まいったな…」

「どうした?」

「えっ?いやなんでもないよ」

そう言って僕は苦笑いでかえす。

電池もギリギリだな。

ピッピッ…、プルルル、プルルガチャ

「あ、もし…」「辰徳!!!今どこにいるの??」

電話の相手僕の姉だ。

「もしもし、何があったの？」

「会社から電話あって、連絡もとれないし？何があったの、もしもし！」

「ちょっ、姉ちゃん落ち着いて！電池ないんだ、詳しくはあって話すよ、悪いけど今すぐ家に来てほしい」

「えっ？今から辰徳あんた」

プツン。

やっぱり落ちたか！

「なぁ、大丈夫か？」

「えっ？」

ふと横に顔をむけると、鼻がくっつきそうになるくらい、彼女が僕をのぞきこんでいた。

「うわぁ、大丈夫…って何が？」

「一人で何か言ってたから」

「あ…あぁ大丈夫だよ。」

「なぁ！」

「なに？」

彼女はボサボサの髪をかきわけながら必死で辺りをみ見渡している。

「太陽どうやってつかまえた？」

はは、これから質問攻めで大変そうだ。

「のぞみちゃん、今からもっと、もっとすごいことおこるから」

「すごいこと？」

「そう、だけど今は時間があまりないんだ、あとから説明するよ」

「せつめい？」

ガチャ、ブルルルル！

「きゃぁぁぁぁぁぁ」

車のエンジン音に驚く彼女、これからおこることに彼女がどうなるか、なんとなく予想がつくが…とりあえず僕は車を走らせた。

町の明かり

「きゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ！」

「きゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ！」

「きゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ」

うぅ、耳がつぶれそうだ！！！！！！

わかってはいたんだが……。

「のぞみちゃん、もうすぐつくから」

「きゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ！」

初めて体験する車、初めて体験するスピード、そりゃこわいだろうな…。

しかし、耳が痛い。

「きゃゃゃゃゃゃ！」

「……。」

「……。」

ん？突然彼女が騒がなくなった。

「大丈夫？」

彼女の顔をのぞきこむように見る。

「小さな太陽がいっぱい、いや、夜だからお月様なの？それともお星さま？」

あぁ町の明かりか、そうだなまるで陸にある月や星たちのようにみえるな、いつも見慣れた景色だが今日は違う景色にみえてくる、や

っと帰ってきた。

「のぞみちゃんあの光の所にママがいるんだよ」

「えっ？本当に？」

「あぁ、もうすぐだ。」

アクセルを踏む足に力がはいる、本当に無事に帰ってこれてよかった。

時間は、深夜３時お姉ちゃんこんな時間に呼び出して怒ってるかな。

僕は自宅へと車を走らせた。

僕たちはようやく自宅につくことができた。

さて、と。

「のぞみちゃん少しの間だけここにいてくれないか？」

「ここに？」

「そう、こわくないから絶対にこの中からでないでほしい、必ずまた僕はもどってくるから」

彼女がコクリと頭を動かす。

「すぐもどるからね。」

僕はそう言って車を飛び出した！

一応ロックかけとくか！

僕は彼女に手をふり、一足先に家にむかった。

ガチャ。

「ただいま、姉ちゃんいる？」

バタバタ！

「辰徳！！！！」

「うわぁ姉ちゃん声でかい、何時だと思ってるの？」

バタバタ。

えっ？

「辰徳！！！辰徳」

「母さん、父さんも来たのか？」

とても心配そうに、姉ちゃんにかんしてはとても怒ってるみたいだな。

「あんたね、なに考えて」

「ストーップ！！！！！」

僕は姉の言葉をさえぎった。

「な、なによ？」

「いい、ビックリしないで聞いてほしい、今から言うことはすべて事実だから」

みんな真剣な顔で僕をみている。

そして、僕は今までのことを簡単には説明した。

「……なにいってるの？」

一番最初に口をひらいたのは姉ちゃんだった。

「今、彼女は車で僕がくるのを待っているんだ」

「本当に、かなえちゃんの？」

「あぁ母さん間違いない！」

母さんはポロポロと泣き出した。

「母さん、大丈夫？」

とっさに姉ちゃんが母さんをささえる。

「彼女は、山を今まで一度も出たことがないんだ、人間もかなえ以外は知らない、とにかく何も知らないんだ」

信じがたいと言わんばかりに親父が首をかしげている。

「あまり一人にはしておけないからつれてくるよ、姉ちゃんお願いがあるんだ」

「な、なによ？」

「彼女、多分一度も風呂に入った事ないと思うんだ、今の格好も見たらビックリすると思うけど、彼女をお風呂にいれてあげてほしい」

「わ、わかった」

「とにかく連れてくるよ」

そう言って僕は足早に車にむかう。

車にむかうと彼女が僕を見つけて窓にへばりついている。

ガチャ。

「お待たせ」

髪で隠れてちゃんとした表情はわからないが、どうやら安心してくれたみたいだ。

「さあ、おりて僕についてきて」

彼女はゆっくりと車をおりて辺りをキョロキョロ見回している。

「ここはね僕の家だよ」

「えええええ、家？これが家なのか？」

「ああ、それとね家には僕の家族がいるけどみんなママの事を知っているからこわがらなくていいからね」

「かぞく？」

ん～やっぱりハテナでかえってくる言葉は意味がわからないのだろうな、とくにかなえは家族なんて言葉は使わなかったんじゃないだろうか…。

「とにかくこわくないし、大丈夫だから」

彼女首をかしげながらコクリとうなずいた。

大丈夫だろうか…。

話をしている間に玄関へとたどりついた。

「わあああああ」

「わあああああ」

すべてが不思議な世界なんだろう、彼女は首がとれるのではないかと思うほどキョロキョロとしながら驚いている。

ガチャ

「連れてきたよ」

彼女がとっさに僕の後ろに姿をかくした。

「大丈夫だよ」

ゆっくりと、僕の背中越しに顔を出す。

それを家族が驚きの表情でみている。

「母さん、姉ちゃん、父さんも彼女がこわがるから」

「あぁごめんなさい、あがって、えっと」

「のぞみだよ」

母さんがゆっくり僕たちに近づいてくる。

彼女は僕の腕を強く握りしめる。

「のぞみちゃん大丈夫だから」

母さんがゆっくり彼女にふれて微笑んだ。

「ママに早く会いたいね、のぞみちゃんおばさんは昔よくあなたのママと遊んだのよ」

「え、ママと?」

「そうよ、だからこわがらなくて大丈夫だから」

そう言ってニコニコと微笑んだ、さすがだな…母親ってすごよ。

すると姉ちゃんがゆっくりと手をのばしてきた。

「のぞみちゃんこっちにおいで、こわくないから」

彼女はずっと姉ちゃんの手をみつめついる。

姉ちゃんも動かずにじっと手をだし続ける。

すると彼女はゆっくりと姉ちゃんの手をとった。

僕は思わずホッとした。

「のぞみちゃん、そのままではママの所にいけないんだ、少し…みず、水浴びしてきてくれるかな？」

「水浴び？雨ふるのか？」

よし、通じた！

「雨は降らないけど、水が出るところがあるから」

「えっ？そうなのか？すごいな！」

「それから…」

姉ちゃんがゆっくり髪をかきわけながら話しかける。

「髪も切っていいかな？」

「髪をきる?なんでだ?どうやってきるんだ?私もずっと思ってた、お前たちは何で髪が短いんだ?」

「みんなね、髪を切ってるから短いの、のぞみちゃんも少しだけ切ってみない」

どうやら彼女は一生懸命考えこんでいる。

「それは、痛いか?」

「大丈夫痛くないよ」

「わかった、いいよ」

みんないっせいに安心する、確かに彼女の髪は床につき、バサバサでとてもこのままにはしておけない状況だ。

「辰徳ハサミ用意して!それから先に彼女をお風呂場までつれていってあげて」

「あ、あぁ、わかった、行くよのぞみちゃんついてきて」

そして、僕たちはお風呂場へむかった。

言葉

「ここだよ」

彼女はキョロキョロと辺りをうかがう。

「いいにおいだ、こんなにおいの花もあるんだな？初めてにおう…
でも花はどこにあるんだ？」

花？石鹸の香りを言っているんだな。

「のぞみちゃん、これは石鹸の香りだよ」

「せっけん？なんだそれ？」

僕はさっきからずっと考えていた、生まれた時から当たり前のように使ってきた物たち、いざ「何か？」と聞かれたら返答にこまる。

そして、その大切さすら忘れてしまっている。

「なぁ？せっけんてなんだ」

「えっ？あぁごめん考え事してた」

バタバタ。

あわただしく足音が聞こえてくる。

「のぞみちゃん、お風呂の前にこれ少し飲まない？」

そう言って母さんがジュースをもってくる。

「あぁ、めちゃめちゃ喉乾いてたんだよ、よくよく考えたら山から何も口にしてないんだ！」

「やっぱり、のぞみちゃんお風呂は汗をかくから水分をとっていたほうがいいわ、はい！」

彼女は僕の顔をのぞきこむ。

僕は母さんからジュースをうけとり一気に飲み干した！

「うまー！ほらのぞみちゃん大丈夫だから飲んでみて」

「はいどーぞ」

彼女はゆっくりグラスをうけとり口をつける。

「冷たい！！」

彼女の顔が凍りついた、そうかこんな冷たい飲み物も初めてだよな！

「大丈…」「あまぁぁぁぁぁぁぁい！！！！！！！」

ビックリした！！！！！！

突然彼女が興奮して叫ぶ！

「なんだこれ？美味しい！」

「そう、よかったお風呂上がりにまた用意しておくから」

母さんの言葉に首をかしげる。

「あとから、また飲めるって」

「本当に！！！！！！いいのか？」

彼女は嬉しそうに跳び跳ねた！

「母さん、彼女はこの世界を全くしらないから、ちょいちょい理解出来ない言葉があるんだよ、だから彼女と話す時は言葉をえらばなくちゃいけない」

「そうね、つい普通に話してしまうわ」

「お待たせー、あら母さんどうしたの？」

姉ちゃんが服をもってやってきた。

「ジュース持ってきてくれたんだよ、それより姉ちゃん、彼女お風呂初めてだからお湯にビックリすると思うよ、気を付けてあげて」

「わかった、じゃああとはまかせて、辰徳はハサミ用意して脱衣場においておいて」

「あぁ、わかった」

そして、僕はお風呂をはなれる。

姉ちゃん、大丈夫だろうか？

シャワー

「じゃあ入ろうか、まずは服を脱いで」

「わかった」

そう言うと彼女は服をゆっくり脱いで丁寧に床においた。

「えっと、あがったらこれに着替えてね」

「きがえる？」

「いや、えっとこの服を着てってこと」

そう言って私は服を見せた。

彼女は目を丸めて驚いている。

「いいのか？こんな綺麗なの着ても」

「いいよ、いいよ、使って」

彼女が嬉しそうに服をながめている、それにしても…なんて体、痩せてるのも気になるけど身体中傷と虫刺されのあとがすごい。

「どうした？」

「何でもない、じゃ、こっちにきて」

私はゆっくりシャワーをひねる。

「わぁどうなってるんだ！！！！！！」

「すごいでしょ、さわってみて熱くない？」

彼女はゆっくりとお湯にてを伸ばす。

「温かい、すごいなどこで火を燃やしてるんだ?」

火を、そうか火はおこせてたのね、と言うことは、お湯大丈夫じゃない。

「じゃあ頭にかけるよー」

バシャッバシャと楽しそうにシャワーをあびあて、シャンプーやリンス、石鹸の香りに驚ながらも楽しそうに笑う、まるで小さな女の子…。

でも辰徳の話が本当ならもう二十歳前後の年のはず…見た目は背丈も小さいしもっと若くみえる。

「姉さん、ハサミおいとくよ」

「あぁ、ありがとう」

そう言って辰徳は脱衣場からでていった。

「なぁ、あいつは私達とは違うなどうしてだ？」

「違う？」

「あいつは、声も、顔も、高さも、違う！胸なんてぺちゃんこでかたいんだ！」

「あぁそれは、辰徳が男の子だからよ！」

「男の子？」

「そっかのぞみちゃんは男の人をしらないんだ」

彼女は大きく首をかしげている。
どう説明しよう…。

「動物達のオスとメスはわかるのかな？」

「わかる」

「それと同じで人にも男の子と女の子がいるの、私達は女の子辰徳は男の子」

「そうか、そうなのか！すごいな！何もかも初めて見るものばかりだ！！」

「なぁ人間はあと何人くらいいるんだ！」

彼女が目をギラギラさせている。

「うーん、分かりやすくいえば星の数ほと」

「星の数？」

「そう、夜空に輝く星くらいいっぱい！」

「えっ？えぇぇぇぇそんなにいるのか？！！すごい…すごいな！！」

「そう、いっぱい！」

その頃僕は疲れてうとうとしていた。

「辰徳きいてるの？」

あぁ聞いてるよ母さん、でも眠くて…。

「かなえ…」

「寝言かしら、辰徳…」

「母さん疲れてるんだろう、少し休ませてあげなさい。」

「お父さん」

布団

「ねぇ、お父さん辰徳の話し本当かしら？」

「さあな、明日病院に行けばわかるんじゃないか」

「かなえちゃんが…なんだか信じられない！もし本当ならあの男…」

ガラガラ！

「あがったわよ、って辰徳寝てるじゃない！」

「かなえちゃん…」

母さんとお父さんはとても驚いた表情でのぞみちゃんをみている。

「母さん、のぞみちゃんよ！私も正直ビックリした！髪を切って顔がみえたらそっくりでさ」

「ママ、ママの話か？」

「ん？そう、のぞみちゃんがママにそっくりだからみんなビックリしてるの」

「私がママに？」

のぞみちゃんは恥ずかしそうに笑っている、そんな顔もかなえちゃんにそっくりで心が痛くなる。

「なぁ、ママの所に行こう！」

「のぞみちゃんママね今は、体の調子が悪くて違う場所で眠っているの、だからのぞみちゃんも今日は、っていってもすうぐ朝だけど、休んでママがおきた頃に会いに行こう」

「えっ？でも…」

「大丈夫必ず会えるから」

のぞみちゃんは悲しそうに下をむいた。

「ママは、具合悪いのしってたやっぱりつらかったんだ…ママが起きたら会えるんだな？」

「うん、約束！」

「じゃ、寝る」

そう言ってのぞみちゃんはその場にねころんだ！

「のぞみちゃん、ここじゃなくて布団で寝よう！」

「ふとん？」

「えっと、とにかくついてきて！」

のぞみちゃんはコクリとうなずいた。

「あっ！まって、のぞみちゃんさっきの飲み物もってきてあげる」

そう言って母さんが台所へバタバタとむかっう。

そして、のぞみちゃんは母さんが持ってきたジュースを嬉しそうに飲んだあと私と一緒に部屋をでた。

「すごいな、すごいことだらけだ！！！」

部屋に向かう途中で突然のぞみちゃんがとびはねる。

「そうだよね、のぞみちゃんはこれからもっといろんな体験で本当に大変かもしれないね！」

「たいけん？」

「なんでもない、ほらここが寝る場所だよ」

そこには大きな布団が二枚ひいてあった。

「ここ？」

私は部屋に入り掛け布団をもちあげた。

「のぞみちゃんここに横になって」

のぞみちゃんはゆっくりと、布団をふまないように、ぐるっとまわって私の隣にやってきた。

「大丈夫、これが布団っていって、とても暖かいの、さぁのって」

のぞみちゃんがゆっくり布団に体をおいた。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ、なんだ柔らかくて気持ちいい！」

「でしょ！そして、この掛け布団をかけたらあったか！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「今日は私も隣にいるから何かあったら起こしてね、お休みなさい」

そう言って私は部屋の電気を消した、しばらくのぞみちゃんは興奮しているようで布団の中で暴れていたけど、やはり疲れていたのだろう、今はぐっすりと眠ってしまった。

夢

「あぁー、たつのんあとだししたー」

「してないよ！」

「したぁー！」

「じゃあ、もう一回な！最初はグーじゃんけーん」

「かなえー」

遠くの方から声が聞こえた。

僕とかなえは声のする方へ顔をむける。

「お母さん！」

かなえのお母さんが元気よくてをふっている！

いつも優しいかなえのお母さん、僕はかなえのお母さんが大好きだった。

「おばさーん」

僕も体全体をつかって腕をふった。

あれ?隣に誰かいる?

「辰徳君、かなえと遊んでくれてたの」

そう言って近づいてきた、おばさんが僕の頭をなでてくれた。

「お母さん、今日はお仕事じゃなかったの?」

「うん、あのねかなえにお話があって帰ってきたの」

かなえと僕はお互いの顔を見つめあい首をかしげた。

「こんにちは」

突然おばさんの隣にいた男の人が話しかけてきた。

「こ、こんにちは」

僕とかなえは小さな声で返事をする。

「ごめんなさい、辰徳君今日はちょっとかなえとお話があるから、また遊びにきてね」

「はい、じゃなかなえ」

「うん、バイバイ」

おばさんとかなえ、そして男の人が一緒にてをふっている。

あの人は誰なんだろ？

ちょっと顔がこわかったな。

次の日

「たつのん」

「かなえ！」

かなえの後ろから低い声がきこえる。

「おはよう、えっと」

「辰徳君だよ」

かなえの隣には昨日の男の人が立っていた。

「おじちゃん、もう大丈夫だから帰っていいよ！」

「そうかい、じゃあ5時に迎えにくるからね」

そう言って手をふりながら男の人が帰っていった。

「かなえ、あの人誰？」

「……。」

「かなえ？」

「新しい…お父さんなんだって」

「えっ？」

えっ？あれ？真っ暗だ。

どうしてしまったんだ！

「かなえー、かなえ」

えっ？さっきのおじさん

「きゃぁぁぁぁぁたつのん助けてー」

かなえがおじさんにおそわれてる！助けなきゃ！

「やめろーーーーーー！」

あれ？届かない！

体が動かない！

「たつのん、たつのん、たつのーん」

かなえー！くそー体が！！！！！！

「たつのん、どうして、助け…て」

「やめろーーーーーー！」

「辰徳！辰徳！！」

はぁぁぁぁぁぁっ！

「はぁ、はぁ、ゆ…め」

「辰徳大丈夫？」

「母さん」

どうやら僕は夢をみていたようだ、そとは明るい、いつの間にか眠っていたんだな。

「母さんのぞみちゃんは？」

「大丈夫、のぞみちゃんはお姉ちゃんと一緒に寝てるから」

「そっか…」

僕はほっとした。

「それより、辰徳大丈夫なの？まだ早いからもう少し休みなさい！」

「あ、あぁそうするよ母さん心配かけてごめん」

母さんは首をよこにふりながらゆっくり立ち上がる。

母さんつらそうだな、子供の頃からかなえをしってるからな、母さんも辛いんだろうな。

「母さんも休んでくれよ」

「はいはい」

かなえまっててくれ、みんなをつれていくよもうすぐあえるからな。

食事

8時…。

結局いろいろと考え事をしてしまい、あのまま眠れなかった。

ガラガラ

「おはよう」

「あ、姉ちゃん、おはよう」

姉ちゃんがまだ眠たそうに目をこすりながら部屋にはいってきた。

「姉ちゃん、ごめんなんか全部まかせてしまって」

「いいわよ、それより辰徳あんた会社にもちゃんと連絡しときなさ

いよ」

はぁぁぁぁぁぁっ！忘れてた！

「おはよう」

姉ちゃんのよこからちらっと姿をみせる少女の姿に僕は驚いた。

「かなえ…！えっ？のぞみちゃん！」

「お前もか」

のぞみちゃんは苦笑いしている。

「昨日もママにソックリって話ししてたのよ」

「あ、そうなの」

ガラガラ

「あら、みんなおはよう」

「母さん、父さん」

「のぞみちゃんおはよう、よく眠れた？」

「おはよう、すごく気持ちよかったぞ！ふとん？だっけ」

そう言って首をかしげながら姉ちゃんをのぞきこむ。

「そう、そう、布団よ」

彼女がにこりとわらっている。

「そう、よかった！じゃあ、ママの所に行く前に朝ごはん食べましょう」

そう言えばさっきから部屋中にとてもいいにおいが広がっている。

「私も手伝うわ！」

そう言って姉ちゃんが台所へバタバタとむかった。

「のぞみちゃんはこっちに座って」

僕は手招きで彼女をよんだ。

彼女はトコトコと僕の隣に座ってゆっくり僕の方に顔をむけた、正直あまりにも学生時代のかなえにそっくりで胸がドクリと音をたてた。

「なぁ、ママ体の調子が悪いんだろ?」

「えっ?あ、うん、そうなんだ」

のぞみちゃんはとても悲しそうに下をむく。

「大丈夫だよ!また元気になれるよ」

のぞみちゃんはコクリと頭を上下した、そんな彼女に僕はゆっくり頭をなでることしかできなかった。

「おまたせ」

姉ちゃんと母さんが机いっぱいに料理をならべはじめた。

「朝からすごい量だな…ってか僕冷蔵庫空っぽだったはずだけど」

「俺が買い物にいったんだよ」

「父さん」

「なんだこれ、すごくいいにおいだ」

かなえと彼女はいったい山でどんな食事をしていたのだろう。

「さて、いただきましょうか」

「のぞみちゃんは、フォークをつかってね」

そう言って母さんは彼女にフォークを手渡した。

感覚

不思議な感覚だ。

家族がそろうのもどれくらいぶりかな。

姉ちゃんが結婚して、僕は一時仕事で出張も多かった、そんな生活の中で年を重ねた両親を心配した姉ちゃん夫婦が、両親を自分達の家にまねいて、それから僕はこの広い家で一人で暮らしていた。

みんながこの家にあつまるのは何年ぶりだろう。

「辰徳ぼうっとしないで食べなさい！」

「えっ！ああいただきます」

ふと、横に目をむけると彼女が朝食とにらめっこをしている。

「のぞみちゃん?」

「これ、全部食べれるのか?こんなの初めてみるぞ」

「大丈夫、食べてみて」

彼女はゆっくりと手をのばした。

「あっまって!のぞみちゃんこれ使って食べるんだよ!」

僕はフォークを手に取り、お手本をみせた。

「手じゃダメなのか?」

「ん～、食べ物が熱いからね、それにこれを使えば手が汚れないだろ」

「そうか？私達は熱くても手で食べてたけど…
でもそれ使ってみる。」

そして、彼女はゆっくり食事を口にはこんだ。

「！！！！！！」

彼女の動きがとまる。

「のぞみちゃん…？大丈夫？」

「なんだこれ？美味しい！！！！！！」

みんないっせいにホッとわらった。

「いっぱい食べてね」

「うぅぅぅ

笑顔

朝食をすませてバタバタとしたくを始める。

何事もなかったように、みんな笑顔で話をしている。

父さんや母さんそして姉ちゃんは、のぞみちゃんに心配させない為だろうな。

そして、僕とのぞみちゃんは…かなえが元気になると信じたくて、自分の気持ちをごまかす為に不安を消したくて笑っているのだろう。

かなえの痩せてガリガリの姿を僕と彼女はしっているから…。

大丈夫、かなえは元気になる、いやきっともうなってるはずだ！

かなえが元気になって退院したらいっぱい見せたい物もある、話したい事もある！

だがその前にあのおじさんをどうするかだな。

「ぶつぶつ」

「何をぶつぶつ言ってるの、早くいくよ」

「あ、あぁごめん」

こうして僕達は病院へむかった。

病院でまってるかなえが、笑顔でまっててくれていると。

信じて。

疑うことすらせずに。

しかし、

僕達は…

このあと

元気なかなえに会えることは

なかった。

不安

病院にむかう途中、携帯電話が音をたてた。

「お、山本からだ！」

僕はあわてて電話をとった。

「もしもし山本、今お前のいる病院にむかってるんだ」

「お前、この数日何してたんだ！何度も連絡してもつながらない！」

山本はなぜかすごく怒っている。

「ごめん、いろいろあったんだ、ちゃんと会って話そうと思って」

「とにかく、急いでこい！」

そう言って電話を切られてしまった。

嫌な予感が脳裏をよぎる。

「どうしたの、大丈夫？誰から？」

母さんが心配そうに話しかけてくる。

「山本から、大丈夫何でもない」

やめてくれよ、大丈夫だよな、大丈夫だよなかなえ！かなえ、元気になったんだろ。

かなえ…。

「母さん…病院ついたら僕が先に様子を見てくるよ、皆はちょっとまっててくれない！」

「辰徳…何かあったの？」

「そうじゃないよ、ただ彼女病院知らないしさ、かなえが治療うけてる姿みたらビックリするかもしれないし…点滴なんか見たらきっとビックリすると思わない？」

「そうね、確かに針が刺さって管もついてるものね」

「だろ、それに山本にもちゃんと説明しないといけないからさ、少しだけまっててよ」

「わかったわ」

僕はくるりと横をむいた。

「のぞみちゃん、今からママに会いに行くけどね、僕が先に行ってちょっと様子を見てくるからちょっとまっててくれない？」

「いやだ！私もいく」

彼女が僕につかみかかる。

「のぞみちゃん、お母さんはね病気だから今はその病気と戦う為に頑張ってるんだ」

「わかってる！でも私も一緒にいく！」

「今ママがいる所は病院と言ってね、そこはママを助ける為の場所なんだ、だけどそこはねママの体の具合がよくないとママとはあわせてもらえないんだ」

「どうして?!」

「ママを守る為なんだよ、だから僕が会えるかどうか先に聞いてくるから、少しだけ姉ちゃんたちとここでまってて」

僕の腕を強くつかんでいた彼女の力がゆっくりとれていく。

「大丈夫、きっと会えるから」

そう言って軽く彼女の頭をなでて、僕は車をおりた。

「じゃあ、彼女をよろしく、連絡するから」

「わかったわ」

そして僕は病院に向かって走り出す、その足は不安で小刻みに震えていた。

感情

病院の受付を見つけてかけよった！

「あ、あの！」

「はい」

走ったせいなのか、不安のせいなのか、言葉がつまって出てこない！

グイ！！

「うわぁ？」

突然腕をつかまれた！！

「こっちだ」

「山本！」「山本先生！」

「彼は僕の知り合いだから！」

山本は驚く受付スタッフに一言告げて僕を引っ張って行く。

「山本、痛いよ！」

僕の問いかけに返事はなく、ただスタスタと引っ張られていく。

ガチャ！

「入れ！」

「ここは？」

「いいから入れ！」

僕は背中をドンとおされる。

「山本、悪かったよ！でも事情があるんだ！」

「はぁー」

山本が大きくため息をついたあと、またゆっくりと息をすいこちらをみる。

「わかってるよ！あんな状態の彼女をほっていくんだよほどの事情があるんだろう！」

ひにくな言い方をする山本。

「あんな状態って、かなえは、かなえは元気なんだろ？」

「……」

「おい！山本！！」

僕は声を張り上げた。

「彼女は、もう助からない…」

全身の力が抜けていく。

「今彼女は必死で戦ってるよ、自分の時間と…」

「…」

山本の声が遠く、遠くから聞こえてくる。

「お前と、娘を…必死に。」

グイ！！

「今はへたばってる場合でも、感情にひたってる場合でもない！早く娘つれてきて彼女にあってやれ！」

そして、僕は後ろへつきとばされた。

僕は走った、彼女の、のぞみちゃん所へ！
かなえ！かなえ連れてきたから！

もう少しだから！

かなえ！

「ねぇ、あれ辰徳じゃない？」

「あら、本当！何だかあわててない？」

僕は彼女のいる車へ、無我夢中で走っていく！

ガチャ！！

「来て！！」

そう言って僕は彼女の手をとり病院へ向かう。

「辰徳！ちょっと、どうしたの？」

「辰徳！」

誰の声も聞こえない。

彼女も何も言わず、必死で僕についてくる。

そのに握られた手が言葉以上の感情伝えてくるかように、強く強く握りかえされた。

病室

病院に走る二人。

病院の入り口で山本が待っていてくれた。

「山本、かなえの部屋は？」

「ついてこい」

山本は僕達をかなえのもとに案内してくれた。

「ＩＣＵ…」

山本が止まった先にかかれた部屋の名前だった。

山本はくるりと振り返り、のぞみちゃんの肩に手をあててしゃがみ

こんだ。

「君が彼女の娘さんだね？」

「娘…？」

「山本、彼女あまり言葉がわからないんだ」

「そうか…のぞみちゃんだね！君に伝えなきゃいけないことがあるんだ」

「山本…」

「なに？」

彼女は冷静に返事をする。

「君のお母さんはね、」「お母さん？ママの事か？」

「あぁそうだよ、もうそんなに長くは生きれないんだ…」

「…」

のぞみちゃん…。

「山本いきなりそんな話し…」

「大切なことだ！」

突然のぞみちゃんが大声でどなる。

「わかってるよ」

「のぞみちゃん…！」

「わかってるから会わせて！」

山本はゆっくりと立ち上がる。

「ついておいで」

僕は正直驚いている、彼女はかなえの死をしっかりとうけとめていた。

こんな知らない所につれてこられて、知らない人に死を知らされる！

僕が逆の立場だったら絶対理解しようとも、信じようともしないだろう。

きっとパニックで騒いでいたかもしれない。

そして僕と彼女は山本の後を

おった、扉が開く！
中では聞きなれない機械音が響いている。

ピッピッピ…。

これは…。

山本が止まった先には、まるで別人のような姿をした彼女がベッドで眠っていた。

そんな彼女の体にはいろいろな機械が取り付けられていた。

嘘だろ、これがかなえなのか…。

医療器具にかこまれた彼女の姿は、まるでテレビの世界のように…。

これが現実なのか？

のぞみちゃん…しまったこんな姿の彼女をみたら絶対に動揺するだろう、「ママになんてことするんだ！」と思っているに違いない！

しかし、彼女はあわてるそぶりもなくゆっくりとかなえに近づいていく。

「のぞみちゃん！」

僕が彼女のもとに駆け寄ろうとした瞬間、山本の手が僕の視界へとびこんできた。

「山本！」

「黙ってろ！」

「…！」

のぞみちゃんはゆっくりかなえに近づくと、かなえの手を握った。

「ママ、ママ…」

「かなえ…」

「のぞみ…」

「ママ！」

かなえが小さな小さな声でのぞみちゃんの名をよび、ゆっくりと目を開くが、その目はうつろで焦点がさだまっていなかった。

涙

かなえがゆっくりとのぞみちゃんの手を握り返すのがわかった。

「のぞみ…ごめんね」

「何が？」

「こわいでしょ？」

「ビックリはしたけどね、大丈夫！」

のぞみちゃんはかなえとたんたんと会話をしている、笑顔で…まるでかなえに何事もないように。

彼女は理解しているのだろうか？

山本の言葉を、そして目の前にいるかなえの姿を…。

「たつのん…」

「えっ…かなえ呼んだ?」

細く小さなかなえの声が聞こえた、僕はあわてて彼女のもとへかけよった。

「かなえ。」

「ごめんね…」

「なに言ってるんだよ!」

かなえの声が僕の心に響く、溢れる感情が押さえきれなくなるのがわかる。

「そんな声だすなよ！かなえはやく元気になってくれよ、話したい事が…や、山ほど…」

涙と溢れでる感情で言葉が出てこない！

かなえ…。

「ごめんね…たつのん」

「あ…あやま…ら、ない、で…」

その時だった。

のぞみちゃんが突然立ち上がると僕の腕を強くつかみ、僕は彼女に引っ張られる。

「の、のぞみちゃんら？」

僕はそのまま、彼女に引っ張られて部屋をでた。

「のぞみちゃん？どうしたの？」

グイ！！

「えっ！？」

おもいっきり体をつかまれ引き寄せられる！

「何で泣く？泣くな！」

「！！！！！！！えっ！」

「ママをこれ以上苦しめるな！」

突然怒鳴りだす彼女に僕は驚いた。

命

「の、のぞみちゃん！」

ドン！！！！！！

僕は彼女に突き飛ばされる！

「この世に生まれてきた命は、いつかは死んでしまうんだ！だけど、たった1つだけの自分だけの命はみんな、みんな大切でなくしたくないんだぞ」

のぞみちゃん…。

「だけど、それ以上につらい思いをするのは、目の前にいる命が悲しい顔をした姿を見ることだって！わかっていても自分の死を自覚させられる恐怖とか、その命をのこして死んでしまう悲しさで死が…うけいれ、られ」

「のぞみちゃん！」

彼女の目には大粒の涙と、強く握りしめられた手が震えていた。

「私の友達はいっぱい…いっぱい死んで…でもママが言ったの、泣いてはいけないって、泣くのは見送ってからでもできるって…」

「ママ…ママ…ママー！！！！！！」

彼女はわかっていたんだ、誰よりも…、そして彼女の友達はきっと山の動物達だろう…そうだな動物の命は人より短い、彼女はたくの友達と別れてきたのだろう、そして今度は一番愛しい人…。

そんな人との別れでも、彼女は最後までその人の気持ちを守ろうとしていたのか…。

「のぞみちゃん…ごめん」

僕はそっと彼女に近づき彼女を抱きしめた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9060x/

世界をしらない少女

2011年11月30日00時49分発行